

インドネシア上座部仏教史研究ノート

石 井 米 雄*

Notes on the Historical Development of Modern Indonesian Buddhism

Yoneo ISHII*

This paper aims at outlining the history of modern Indonesian Buddhism in two parts. The first part, which covers the period up to 1952, deals with four groups or individuals that were instrumental in the Buddhist revival in Java: the Theosophical Society; the International Buddhist Mission, Thaton, Burma; the Ven. Narada Thera from Ceylon; and a *peranakan* writer, Kwee Tek Hoay. The second part examines the shift of leadership after the death of K. T. H. in 1952. Under the dynamic leadership of the Ven. Ashin Jinarakkhita, the revived Buddhist religion burgeoned to such an extent that a *bhikkhu sangha* was established to produce native monks and novices.

The political climate of the Republic after the 9.30

Coup compelled the Indonesian Buddhists to search for a “Tuhan Yang Maha Esa” within their religion, which is often considered “godless.” The Ven. Ashin Jinarakkhita successfully overcame the difficulty by referring to the “Adi Buddha” found in an old Javanese Buddhist treatise as tantamount to “the One God.” This, however, eventually caused a schism, since the conservative Theravadin felt the accommodation heretical and tried to find a solution within the framework of the orthodoxy. Later the unity of the Buddhist minorities in the Islamic Republic was restored, when the two factions agreed in Bogor, in May, 1979, to respect each other's interpretations of the “Tuhan Yang Maha Esa” by considering them “one and the same in essence.”

はじめに

20世紀に入ってからインドネシア各地に広まった南方上座部仏教の歴史は、これまでほとんど研究者の注意をひかなかった。¹⁾ 現在、インドネシア共和国の仏教徒数は、²⁾ 1975年の統計でも109万人に達しており（表1, 2, 3参照）、政治的理由により最近の数字は公表

されていないものの、一説には、200万人あるいは300万人を越えるともいわれている。

表1 インドネシア共和国宗教別人口統計
（出典：Statistik Indonesia 1975 に基づき作成）

宗 教	信者数(人)	百分比 (%)
イスラーム教	103,579,496	87.51
キリスト教	8,741,706	7.38
カトリック	2,692,215	2.27
プロテスタント	5,151,994	4.35
その他のキリスト教	897,497	0.76
ヒンドゥ教	2,296,299	1.94
仏 教	1,092,314	0.92
儒 教	972,113	0.82
その他	1,695,902	1.43
合 計	118,367,850	100.00

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) インドネシアの現代仏教についての簡単な紹介は Bakker [1976] に求められる。わが国では前田恵学氏が、早くも1976年に、現地調査に基づく論考 [前田 1976] を発表して問題点の所在を明らかにした。筆者のインドネシア仏教への関心はこの前田論文によって触発されたものである。記して感謝の意を表したい。

表2 島嶼別仏教徒人口
(出典: Statistik Indonesia 1975 に基づき作成)

島 嶼 名	仏教徒数 (人)	百分比 (%)	対人口百 分比(%)
Jawa & Madura	604,030	55.30	0.79
Sumatera	423,940	38.81	2.04
Bali & Nusatenggara	25,394	2.32	0.38
Sulawesi	24,471	2.24	0.29
Kalimantan	14,254	1.30	0.28
Maluku & Irian Jaya	225	0.02	0.02
合 計	1,092,314	100.00	0.92

かりに低く見積って200万人とみても、その数は、仏教国ラオスの178万人(1978年国連統計に基づく推計)を上回っており、その動向は上座部仏教の比較研究上、無視できない存在となっている。

筆者は、1978年と79年の2度にわたり、京大東南アジア研究センター連絡事務所管理のため通算3カ月間、ジャカルタに滞在したが、その間にインドネシア上座部仏教信仰の実態の一端に触れる機会に恵まれ、また、ジャカルタ中央博物館図書館(The Central Museum Library)所蔵の文献によって、上座部仏教のインドネシアへの弘通に関する若干の歴史的事実を確認することができた。イ

- 2) 利用した統計書(Statistik Indonesia 1975)には「宗教別」(agama)として「仏教」(Buddha)が掲げられており、本稿の数値はこれによった。一般に東南アジア諸国の宗教統計で、「仏教」という場合、上座部仏教徒と中国系仏教徒を分ける場合(例:1960年以前のタイ国国勢調査)と、両者をあわせて集計する場合(例:1970年以後のタイ国国勢調査)とがある。中国系の「仏教徒」は同時に儒教徒であり道教徒でもあるいわゆる「三教」の信奉者であるため、場合によっては「仏教徒」ともされ、「儒教徒」とも取り扱われることがある。インドネシアの1975年統計の場合には、「仏教」(Buddha)のほかに「儒教」(Kong Hu Cu)の信者数として972,113人(総人口の0.82%)が掲げられているので、ここでいう仏教徒とは、(1)pribumi 仏教徒と、(2)peranakan のうち、とくに仏教徒であると表明した者ないし仏教徒と認められた者の双方を含むものと考えられる。

表3 州別仏教徒人口
(出典: Statistik Indonesia 1975 に基づき作成)

州 名 (Propinsi)	仏教徒数 (人)	百分比 (%)	対人口百 分比(%)
Sumatera Utara	264,862	24.25	4.00
D.K.I. Jakarta	263,435	24.12	5.79
Jawa Tengah	125,303	11.47	0.57
Jawa Barat	113,213	10.36	0.52
Jawa Timur	76,917	7.04	0.30
Riau	67,507	6.18	4.11
Sumatera Selatan	52,053	4.77	1.51
D.I. Yogyakarta	25,162	2.30	1.01
Sulawesi Selatan	17,029	1.56	0.33
Lampung	14,573	1.32	0.53
Bali	14,426	1.32	0.68
D.I. Aceh	12,687	1.16	0.63
Nusatenggara Barat	10,665	0.98	0.48
Sumatera Barat	9,408	0.86	0.34
Kalimantan Selatan	9,203	0.84	0.54
Sulawesi Utara	7,146	0.65	0.42
Others	8,725	0.80	0.09
合 計	1,092,314	100.00	0.92

ンドネシアにおけるいわゆる「仏教復興」(後述参照)の動きは、この国における「神智学協会」(Theosophical Society)の活動と密接に関係しており、とくに初期の段階においてそうであるため、神智学協会のインドネシアにおける活動についての歴史学的研究の蓄積が不十分な現状においては、多くの不明な点を残さざるを得ないが、とりあえず、現在の段階で確認し得た事実のみを記して、将来行われるべき本格的なインドネシア上座部仏教史研究のための備忘としたい。

I 戦前の「仏教復興運動」

20世紀インドネシアにおける「仏教復興」には、おおよそつぎの4種の人びとが関与していたとみることができる。

第1は、オランダ人を中心とする「神智学協会」の関係者たちである。1901年6月のスマランにおける『蘭印神智学月報』(Theo-

sofisch Maandblad van Nederlandsch-Indië) の創刊, および1907年と推定されるボゴール (当時の Buitenzorg) における『インドネシア神智学報』(*Pewartia Theosofie boeat Indonesia*) の創刊³⁾ という事実によって, われわれはインドネシアにおける「神智学協会」の活動が, すでに今世紀の初頭においてジャワで開始されていることを知ることができる。そもそも神智学協会と仏教との実践的かわり合いは, 1880年5月, 同協会の創設者オルコット大佐 (Colonel Henry S. Olcott) と, ブラヴァツキー女史 (Madame Helen P. Blavatsky) のふたりがセイロンを訪問したことに始まった。⁴⁾ とりわけオルコット大佐のセイロン仏教復興への貢献には目覚ましいものがあった。かれは1880年以来, その死に至るまでの27年間, ほとんど毎年のようにセイロンを訪れ, その当時キリスト教の文化的支配に抗して伝統的な仏教文化を再興しようと努力していたセイロン仏教僧の活動を支援している。⁵⁾

セイロンにおけるオルコット大佐の場合には, 300年にわたる異教徒の植民地支配の結果, 息も絶えだえとなっていた仏教サンガを, 上座部発祥の地に再興するという大義名分が, かれの “anti-missionary missionary” としての情熱をかき立てた。「われわれこそは, 仏教を敵視し中傷して止まぬかのミッションナリーたちの面前で, あえて仏教の徳を讃美し, 仏教の与える心の安らぎを讃えて止ま

ぬ最初の白人旗手であったのだ」と, オルコットはその日記の中に自己の役割を感慨をこめて記している [Olcott 1954: 165]。しかし仏教が滅んですでに数世紀を閲し, わずかに各地に残された過去の遺構によって往時の繁栄を偲ぶにすぎなかったインドネシアにおいては, 神智学協会の「仏教復興」も, おそらくは一部知識人エリート層の知的関心を誘うにすぎなかったものと思われる。ともあれ, すでに1918年ごろには, ボゴールの神智学協会支部においてブッダの生誕, 成道, 入滅を記念するヴェーサカの祝祭が催されていたといわれている。⁶⁾ 下って1930年になると, ボロブドゥールにおいて「インドネシア神智学協会」(Perhimpunan Theosofi Indonesia) 主催のヴェーサカ祝祭が行われたという記録が現われる [Buku Peringatan n. d.: 35]。現在のところ, このころまでのインドネシア theosophist の仏教に関する活動について, これ以上の状況はわからない。今後は, 前述した神智学協会の機関誌などの検討により研究がさらに進展することが期待される。

さて, インドネシアにおける初期の仏教復興運動に関係した第2のグループは, ビルマのタトゥンに本部を置く「国際仏教宣教協会」(The International Buddhist Mission, Thaton, Burma) であった。⁷⁾ 同協会のインドネシア, とりわけジャワにおける活動の中心的人物はオランダ人ファン・ディーンスト (Josias van Dienst) であった。1929年7月, かれの手によって「ジャワ仏教伝道協会」(Association for the Propagation of Buddhism in Java) がバタヴィアにおいて設立された。ファン・ディーンストによると, この協会への入会希望者の中には, 仏教徒への改宗を公に表明せず, 単に仏教について学ぶ目

3) 土屋健治氏の御教示による。なお『インドネシア神智学報』の創刊年次は, 被見し得た同誌1929年4月号のコピーに, 第22年第4号とあるところから逆算して推定したものである。

4) 「神智学協会」については, さしあたり Besant, A. [1958] および Anonymous [1951] 参照のこと。またオルコットについては, Howard Murphet による伝記 [Murphet 1972] がある。

5) セイロンにおける神智学協会の仏教復興への貢献については Malalgoda [1976] の Part Two を参照。

6) 後述する Tjoa Hin Hoay 女史よりの聴き取り (1979年5月30日, ジャカルタ) による。

7) 以下の記述は [NB 1933: 17-18] による。

的に入会する者が多かったため、実態に則して会の名称を変更することとし、同年末、「ジャワ仏教会」(The Java Buddhist Association)と改称して再発足したという。協会員には「正会員」(Leden)と「準会員」(Aangesloten)の区別があり、前者は仏教徒であることを公に表明した者(die zich openlijk Boeddhist verklaarden)、後者は仏教についてより深く学ぶためまず会員となり(die zich alleen aansloten)やがてよき「同調者」(belangstellenden)となることが期待される者であった。同協会にこのような「準会員」の制度がもうけられていたことは、ジャワにおける宗教状況、とりわけ abangan 知識層の宗教意識を知る上で興味ある素材を提供しているように思われる。

1932年2月、「ジャワ仏教会」は、前記「国際仏教宣教協会」(I. B. M.)の蘭領インドにおける正式代表機関となり、ファン・ディーンストは、I. B. M. の Deputy Secretary-General の資格で蘭領インドにおける仏教布教の責任を負うこととなった。1933年9月には、同協会からオランダ語の機関誌 *Nama Buddhaya* が、ボゴールで創刊された。同誌の創刊号は32ページ立てで、「ダンマパダ」の抄訳、「五戒」の解説、ファン・ディーンストの講演要旨などが掲載されている。しかし、結局3号の雑誌と1冊のヴェーサカ特別号⁸⁾を発行しただけで、1934年に廃刊されてしまった。その理由は1934年7月に内部的事情で「ジャワ仏教会」が解散したことによる。⁹⁾

「ジャワ仏教会」に代ってジャワにおける

仏教布教の推進組織としても受けられたのは「ジャワ中央仏教研究所」(Het Centraal Boeddhistisch Instituut voor Java)であった。しかしこの研究所は、1934年の8月、9月の2回、機関誌と銘うった4ページ立ての小冊子(*De Dhamma in Nederlandsch-Indië*)を発行したこと以外、その活動状況はわかっていない。

インドネシアにおける仏教復興運動において、もっとも象徴的役割を演じた人物として第3に取り上げなければならないのは、セイロンの僧ナーラダ長老(Rev. Narada Thera)である。今日、インドネシア語で書かれている大方の文献は、同長老が1934年4月に、初めてジャワ島を訪問したことをもって「仏教復興」(kebangkitan kembali agama Buddha di Indonesia)の開始の時としている。¹⁰⁾

ナーラダ長老は、1898年7月14日セイロンに生れた、アマラプーラ・ニカーヤ派の僧侶で、かれ自身も「神智学協会」の同調者である。1933年の末、インドのマドラス州アジャーラにある神智学会本部で協会の年次大会(Anniversary Convention)が開催された際、同長老はたまたま同席した在インドネシアの theosophist から、ジャワにおける仏教復興の状況を聴き、かれらの招聘によってジャワ島訪問を決意したという。¹¹⁾

ナーラダ長老は1934年3月4日バタヴィアに到着、同月24日ジャワを去るまで20日間にわたり、きわめて精力的にジャワ各地を旅行し、仏教講演を行なっている。同長老の事跡として今日もなおインドネシアの仏教徒の間に語り伝えられているのは、同年3月10日、ボロブドゥール遺跡の境内において同長老の手によって行われたボダイ樹(pohon Bodhi)

8) *Het Boeddhisme als wereldbeschouwing, moraal en religie*. door Boeddhist. Pres. W. Josias van Dienst. 1934. Batavia. この小冊子には、NBの第2年第1号である旨の注記が入っている。

9) この間の詳細な事情については DDNI [1 (Aug., 1934): 1-2] および MD [29 (Aug., 1934): 1110-1112] 参照。

10) たとえば、Widyadharma [1977a: 7] や Buku Peringatan [n.d.: 35] など。

11) ナーラダ長老からの聴き取り(1979年5月31日、ジャカルタ)による。

の植樹である [Widyadharma 1977a: 7]。植樹式には、ジョクジャカルタ神智学協会々長 (President Theosofische-vereeniging Djokja) はか数名の theosophist とその同調者が立ち会っている。

ナーラダ長老のジャワ来訪は、ジャワでの仏教復興を願う関係者¹²⁾にとって画期的事件と考えられていたらしく、たとえばマレー語の宗教雑誌 *Moestika Dharma* (後述) は 1934年4月号を「ナーラダ長老特集号」(Narada Thera Nummer) とし、同長老のジャワ島における活動を詳細に報道している [MD 25 (Apr., 1934): 919–925]。この記録によって、われわれは当時のジャワ島における仏教信仰の状態についてのひとつの手がかりを得ることができる。ナーラダ長老は、ボゴールを中心に、バタヴィア、バンドン、ジョクジャカルタ、ソロの各市を訪れ、それぞれの神智学協会において講演を行なっているが、あわせて各地の中国寺院に立ち寄り、中国系仏教徒の前で仏教に関する講演を行なっているのが注目される。たとえば、ボゴールの Hok Tek Bio, バンドンの Klenteng Bandoeng, ソロの Klenteng Tin Kok Sih, バタヴィアの Klenteng Kwan Im Tong などがそれで、バンドンでは 1,000 名に上る聴衆を集めたが、その大部分は中国人 (bangsa Tionghoa) であったという。すなわちこれは、ジャワにみられる 1930 年前後の「仏教復興」が、(1) オランダ人を中心とする theosophist における仏教志向と、(2) 在住中国系住民の複合的

信仰形態の中における仏教的要素との結合によってもたらされたことを示しているものといえよう。そこでつぎに、「仏教復興」運動に関与した第4の、そして今日に至るまでもっとも持続的な影響を残した人物として Kwee Tek Hoay (以下、かれ自身の用法にしたがって K. T. H. と略称する) について触れなければならない。

K. T. H. は、福建系の peranakan として、1886年ボゴールに生れた。¹³⁾ 当時の peranakan の多くがそうであったように、かれは福建語が話せず、マレー語 (bahasa Mèlajoe) を母国語として育った。少年時代、伝統的な中国式的教育を受けたが、教師の保守的態度になじまず、英語、オランダ語、フランス語を自習して欧米の文献を読み、これらの読書を通して東洋の思想と宗教に触れた。¹⁴⁾ その興味の幅はまことに広く、仏教、儒教、道教という中国人のいわゆる「三教」のほか、キリスト教、イスラーム教、ヒンドゥ教からアラビア、ペルシャの思想・文学に及んでいる。早くから「中華会館運動」(Tiong Hoa Hwe Kwan の頭文字を取ってふつう T.H.H.K. と略称される) に共鳴し、長く同会館のボゴール支部長をつとめた。かれは当初1910年にバタヴィアで創刊された peranakan の新聞〈*Sin Po*〉に寄稿していたが、やがてその論調に批判的となり、1926年、自ら週刊誌 *Panorama* を創刊した。この雑誌は「諸民族のための週報」(Soerat kabar minggoean boeat segala bangsa) と副題されているとおり、古今東西の文化文明を幅広く紹介している。K. T. H. は「神智学協会」の思想に共鳴して熱心に活動し、後年、同協会から The Star of the Orient という功労章を受けた。¹⁵⁾

12) 当時のジャワにおける仏教関係者が、オランダ人を中心とする白人と、中国人、インド人およびインドネシア人から成っていたことは、仏教徒協会の役員の構成に示されている。すなわち、1名の白人会長の下に、それぞれ中国人 (bangsa Tionghoa)、インド人 (Britisch Indier) およびインドネシア人 (Indonesier) を代表とする3名の副会長が置かれていた [MD 25 (Apr., 1934): 924]。

13) 漢字名は、郭徳懷。以下の履歴は主として Suryadinata [1978: 63–64] による。

14) Tjoa 女史よりの聴き取りによる。

15) Tjoa 女史よりの聴き取りによる。

この事実から、かれもまた「神智学協会」の仏教志向の影響を受けたであろうことが推定される。しかし、*peranakan* であるかれには、同時に一中国人として、自己の生れ育った文化の一部としての仏教があった。かれの思想遍歴の中で、仏教がいつごろ中心的関心事となったかをあとづけることは困難であるが、Sir Edwin Arnold の *The Light of Asia* (1879) や、Paul Carus の *The Gospel of Buddha* (1897) によって原始仏教の一端に触れたことを後年の著作によってうかがうことができる [K. T. H. 1931: XII]。かれが1927年末の *Panorama* に寄せた「仏教」(Agama Buddha) と題する一文の中のつぎの一節は、かれの仏教的自覚の過程を示す言葉として興味深いものがある。

「真の仏教 (Agama Buddha jang betoel), すなわち泉から湧き出たばかりの清水のように清浄な仏教とは、[世の人が仏教という言葉から連想するあの] シナ寺とそこに立ち並ぶ仏像・神像やそれにまつわるさまざまな儀礼とは、まったく無縁の存在である。それは人間に永遠の幸福と満ち足りた心を得さしめる道を示す教えである」 [*Panorama* 55 (31 Dec., 1927): 465]。

この一文を書いたのち、K. T. H. は6年にわたって *Panorama* に仏伝を連載している。マレー語をもって書かれた最初の仏伝と注記されるこの作品は、1931年から1933年にかけて、*Hikajat Penghidoepan dan Pelajaran Buddha Gautama* 全10冊としてバタヴィアで出版された。

K. T. H. の幅広い興味は、このころから明確に宗教に向かって収斂し始めたようである。1932年、かれは *Panorama* を、ライデン大出身の弁護士で政治に関心をもった Phoa Liong Gie に譲渡し、自らはもっぱら宗教と思想を取り扱う2種類の月刊誌を新たに発刊した [Suryadinata 1978: 63]。そのひとつが

1932年4月創刊の *Moestika Dharma* である。この雑誌は表紙に漢字で「聖教月報」という文字が入れているため中国語の雑誌と間違えられることがあるが、用語はすべてマレー語である。副題に *Maandblad tentang Agama, Kabatinan dan Filosofie* とあり、世界の各宗教、思想の紹介が中心である。『大学』、『中庸』、『老子道德経』、『バガヴァッド・ギータ』、『ルバイヤット』など古典の翻訳、仏教、キリスト教、イスラーム教、古代ギリシャ宗教の紹介、タゴールなど東洋の詩人の作品解説、神智学思想の紹介など、力点はもっぱら東洋に置かれている。驚くべきことは無署名の論説以外に、毎月かならず2, 3篇以上の論文を、K. T. H. 自らが執筆していることで、「暇さえあれば机に向かって筆を走らせていた」という令嬢 Tjoa Hin Hoay 女史の証言も首肯できる精力的な文筆活動である。

1934年10月、K. T. H. は、*Moestika Dharma* と並行して、もう1冊の月刊雑誌 *Sam Kauw Gwat Po* (三教月報) を創刊した。これもまた誌名までが中国語であるにもかかわらず、内容はすべてマレー語である点に注意を要する。副題にみえたとおり、本誌は「バタヴィア三教会」(Sam Kauw Hwe Batavia) と「バタヴィア仏教協会」(Batavia Buddhist Association) の機関誌を兼ねていた。¹⁶⁾ K. T. H. は両組織のいずれにおいても中心的役割を果たしていた模様である。前者はナーラダ長老のジャワ来訪を機として、*peranakan* の宗教的自覚と結束を促進するために1934年5月に設立された団体で、その後全国的に拡大して今日に至っている。後者の

16) 表紙に *Orgaan dari Sam Kauw Hwe Batavia dan Batavia Buddhist Association* の文字がみえる。のち、これに Menado と Telokbetong の Sam Kauw Hwe が加えられた。なお、1941年1月号以降 Telokbetong の文字が消え、両組織とも Batavia dan Menado となっている。

創設の時期は不明であるが、1934年8月にはすでに活動していることが文献的に立証できるので、¹⁷⁾ 前者とほぼ同じころと考えて大きな誤りはあるまい。ボゴールを中心とする神智学協会の仏教運動の白人優位に対抗する立場から、K. T. H. を中心とする *peranakan* 仏教徒の始めた運動であるともいわれている。ちなみに「バタヴィア仏教協会」の書記として事務局の運営にあたったのは K. T. H. の令嬢 Tjoa Hin Hoay 女史である。¹⁸⁾ ボゴールのミッションスクール出身の Tjoa 女史は英語に堪能で、神智学協会関係者との連絡はもっぱら女史の役目であったという。

Moestika Dharma は1941年末まで続いて廃刊された。*Sam Kaww Gwat Po* も1942年1月、第88号をもって廃刊されている。おそらくは日本軍の南方作戦の開始と関係があると思われるが、事実の解明は今後の日本軍政における対 *peranakan* 宗教行政の研究の進展をまたなければならない。

インドネシア、とりわけジャワにおける仏教復興という文脈で K. T. H. の活動を眺める時、つぎの四つの特徴を認めることができる。第1に、ボゴールを活動の本拠としていたかれの動きが、同じくボゴールに本部を置

いた神智学協会を中心とする白人の宗教的活動と密接に関係していたことである。これはかれが神智学協会から功労章を受けたことにもよく示されている。

第2に、それにもかかわらず、かれはこれらの白人から独立して、独自に仏教運動を展開しようとしたことである。Batavia Buddhist Association の創設はこうした志向の現われとみられよう。

第3に、かれが中国文化を背景として生れ育った *peranakan* として、かなり早くから仏教に関心を抱いていたことである。しかしかれが求めた仏教は、在来中国寺院 (kelenteng) で行われていた儀礼中心の中国仏教ではなく、自らの努力によってヨーロッパ語の文献を通して理解した原始仏教であった。

第4に、にもかかわらず、*peranakan* の知的指導者・組織者としての K. T. H. は、中国宗教に伝統的にみられる複合性（儒教・仏教・道教）を許容している。この点は重要である。なぜなら、K. T. H. の指導によって推進された仏教運動におけるこの「中国的複合性」は、現在のインドネシア仏教界がかかえるいくつかの問題にも深くかかわりをもっているからである。

すでにみたように、オランダ人らを中心とする神智学協会関係者の出版活動は、仏教に関するかぎり1934年前後のごく一時期で終わっている。これに対して K. T. H. の文筆による仏教普及活動は、1926年以降一貫して続けられ、戦時中の一時期を除き、1952年かれの死に至るまで継続して行われている。しかもかれの残した遺産は今日の多様な仏教運動の中に、多様な形で継続されているのである。その意味において、1952年以前におけるインドネシア仏教史研究は、まず K. T. H. 研究から始められなければならないであろう。

17) *DDNI* [1 (Aug., 1934): 2] には、Buitenzorg Buddhist Circle ならびに The International Buddhist Association とともに The Batavia Buddhist Association の活動が紹介されている。これによると定例の集会が毎週木曜日の晩、バタヴィアの Mangga Besar の観音堂 (Kwan Im Tong) で開かれていた。なお、上記 Buitenzorg Buddhist Circle の成立の由来などについての詳細は不明であるが、集会の場所はナーラダ長老も訪問した Ho[k] Tek Bio であった。

18) 同女史の略歴については Suryadinata [1978: 176-177] 参照。同女史は Ny. Visakha Gunadharma の筆名で、現在 (1979年5月) もなお、インドネシア語による仏教布教活動のため健筆をふるっている。訳書に *Aneka Cerita Buddhis* (1978. Jakarta.) などがある。

II 戦後のインドネシア仏教の歩み

Kwee Tek Hoay は1952年7月4日、ジャカルタで逝去した。享年66才であった。かれの死はインドネシアの仏教運動における指導者の世代交代を意味している。かれに代って新たに登場したリーダーは、同じく *peranakan* でボゴールの人 The Bwan An (Tan Bwan An, Buan An という綴り方もある) であった。The Bwan An の初期の経歴については不明な点が多い。オランダの Groningen 大学に留学して物理学を修め *magna cum laude* で学士号を得て帰国したといわれるが [Bakker 1976: 149], 一説には工学を学んだともあり [Willmott 1960: 252], いずれかはっきりしない。帰国後かれはジャカルタの高校教師となった。かれがその後どのような経緯で *peranakan* 社会の宗教的指導者となり得たかについては一切わかっておらず、すべて今後の検討にまたなければならないが、1952年、かれは全国の Sam Kauw Hwee を統合して、「三教会」の全国組織である Gabungan Sam Kauw Indonesia [G. S. K. I. と略す。中国名は印尼三教聯合會] を結成し、その会長となっている。¹⁹⁾ そして同会の機関誌として *Tri Budaya* がジャカルタの同聯合會本部から刊行されることになった。²⁰⁾

19) G.S.K.I. の結成の正確な時期は不明だが、仏暦2496年すなわち西暦1952年のヴェーサカを記念する小冊子 [GSKI 1952] が G.S.K.I. の名で発行されていることを考えると、同聯合會の結成は、1952年のヴェーサカの月、すなわち同年5月以前であった確率が高くなる。もしこの推定が正しければ、G.S.K.I. の結成は K.T.H. の生前ということになり、同会の結成の推進者が、果たして The Bwan An であったかどうかは輕輕に断定できなくなる。なお Buku Peringatan [n.d.: 35] が G.S.K.I. の結成の年を1953年としているのは誤りであろう。

20) 同誌の発行責任者は、副会長の Tjoa Hin Hoay 女史であった。

翌1953年、The Bwan An はビルマに渡り、ラングーンの Vihara Mahasi において修行を積み、Mahasi Sayadaw (Agga Maha Pandita Bhaddanta U Sobhana Mahathera) によって得度を受け、Anagarika Sthavira Ashin Jinarakkhita Thera (以下、Ashin Jinarakkhita と呼ぶ) という称号を得て、2年後の1955年インドネシアへ帰った [Loc. cit.; Bakker 1976: 149; Buku Peringatan n. d.: 15-17; Widyadharma 1977b: 12]。Mahasi Sayadaw は瞑想法に優れた高僧として知られた人物で、各国から同師の許を訪れる修行者が多かったといわれる [Widyadharma 1977b: 16]。したがって、Ashin Jinarakkhita の主たる関心も、瞑想法の修行におかれていたものと考えてよいだろう。この点、現代インドネシア仏教にみられる〈meditasi〉重視の傾向との関連において指摘しておきたい。

Ashin Jinarakkhita がビルマに渡った1953年は、前年に始まったインドネシアの仏教のリバイバルがさらに加速された年である。この年のヴェーサカは、G. S. K. I. の会員によって、仏教復興ゆかりの地ボロボドゥールにおいて祝われ、史上初めて5色の「仏教旗」(Pandji Buddhis Sedunia) が掲揚された [Buku Peringatan n. d.: 35]。この年には、またインドネシアにおける在家仏教徒の団体である Persaudaraan Upasaka-Upasika Indonesia (P. U. U. I.) がジャカルタで結成されている。P. U. U. I. はその後各地に拡大し、数年後にはメダンからマカッサルに及ぶ全インドネシアの45都市に支部が置かれるまでに発展した。

1954年12月にラングーンで開催された「世界仏教徒会議」に出席したのち帰国した Ashin Jinarakkhita は、Sam Kauw Hwee を代表する仏教伝道者として精力的に各地を旅行して講演を行なった。たとえばスマラン

の例をみると、1955年の春だけで数回の仏教講演会を、華僑会館、神智学協会講堂、中国寺院などで開催し、また瞑想法の指導を行なっている。こうした活動の結果、6人のインドネシア人とふたりの女性を含む11人の中国人が同師の弟子となったという [Willmott 1960: 252]。Willmott は、Ashin Jinarakkhita の魅力をかれの若さ、おだやかではあるが確信に満ちた明快な表現、内面的な静寂をたたえた容貌、そして世の名利を捨てて清貧の生活に入ったという事実にあるとしているが [Ibid.: 252-253]、この点は今日同師を批判する人びとの間でさえ認められている。

1956年と1957年の両年は、南方上座部仏教徒にとって記念すべき「仏紀2500年」の祝賀行事が各国で催された年である。²¹⁾「過去5世紀の間、仏教はインドネシアで眠り続けていた。いまこそ覚醒の時である。」Ashin Jinarakkhita はかれの著書の中でこう書いている [Bakker 1976: 149]。この年かれはスマランの近くに2寺を建立し、それぞれを Wihara Buddha Gaya, Wihara Buddha Jayanti と命名した [Loc. cit.]。²²⁾ 後者は同年ランゲーンで開かれた仏紀2500年の祝典の名 Buddha Jayanti にちなんだものである。

1957年2月12日、スマランにおいて「スマラン・インドネシア仏教会」(Perhimpunan Buddhis Indonesia Semarang) が結成された [Buku Peringatan n. d.: 35]。また同年5

月には、前年の同月から開かれていた 2500 Buddha Jayanti の終結宣言と、G. S. K. I. の大会 (Kongres) が、同じくスマランで開かれている [TB 38 (Mar., 1957): 5; TB 41 (Djuni, 1957): 19]。いずれも Ashin Jinarakkhita の指導によるものであり、当時かれの布教の重点がスマランに置かれていたことがわかる。

翌1958年2月、セイロンからナーラダ長老が久々にインドネシアを訪れた。同長老はこの来訪の機会に、スマランの Kassap に建立された Vihara 2500 の献堂式に立ち会っている [TB 52 (Mei, 1958): 8]。同年の末には、同じスマランの Watugong, Ungaran にある前記 Wihara Buddha Gaya で、インドネシア仏教会 (Perhimpunan Buddhis Indonesia. 一般に Perbuddhi と略称される) の第1回大会が開催された。この大会には、Medan, Jakarta, Bandung, Semarang, Ungaran, Magelang, Purworejo, Kutoarjo, Piji, Wonosobo, Parakan, Ngadirejo, Yokyakarta, Solo, Madiun, Blitar, Surabaya, Lasem, Rembang, Pati, Makassar, Singaraja の各地から代表が出席している [Buku Peringatan n. d.: 35]。このリストによってわれわれは仏教復興の波動がすでにジャワを越えて、スマトラ、バリ、マカッサルなどにも及んでいる状況を知ることができる。こうした動きは翌1959年のヴェーサカに至って最高潮に達する。この年の5月15日から29日にかけて、Perbuddhi と G. S. K. I. の共催で、ラオスを除くすべての上座部仏教国から高僧を招聘し、インドネシア政府代表と仏教国の大使臨席の下にボロブドゥールにおいてヴェーサカの祝祭が挙行された。セイロンからはナーラダ長老、ビルマからはマハーシ・サヤドー、タイからはプラウィサーン・サマナクン長老 (Phra Visalsamanagun)、カンボジアからはソムダエツ・チョウン・ナート大長老

21) 計算法によって1年のずれがある。ビルマ、セイロンでは1956年が、タイ、ラオス、カンボジアでは1957年がそれぞれ仏暦2500年にあたった。前者では4月24日が、後者では5月13日がそれぞれヴェーサカの日にあたったので、この日を中心として盛大な行事が各地で催された。インドネシアの仏暦計算法はセイロン風なので、1956年が仏暦2500年とされた。

22) ただし、同書には Buddha Gaya を Bodhgaya としているが、TB [32 (Sept., 1956): 13] にしたがって実際に現地で用いられている綴り字に訂正した。

(Somdach Choun Nath Mahathera) がそれぞれ出席している [TB 65(Djuni, 1959): 5]。

インドネシア現代仏教史の研究上見逃すことができないのは、招聘を受けたこれら各国の高僧たちの手によって、Vihara 2500 に“Sima International”と名付ける戒壇がもうけられ、そこで得度を受けることが可能となったことである。²³⁾ 最初にこの地で比丘になったのは、G.S.K.I. の副会長の地位にあった Tangerang 出身の peranakan, Ong Tiang Biaw であった。この時、さらに2名のインドネシア人がサーマネーラとして出家している。

この年の前後にインドネシアの各地においてみられた仏教復興の動きについて、Bakker はまず新寺院の建設を指摘している。スマトラのパレンバンに建てられた Wihara Dharmakirti, スラカルタの Wihara Prajnaparamita, ジョクジャカルタの Wihara Indraloka, バリ島シンガサリの Wihara Buddha などがその一例である。つぎに注目されるのは大量改宗で、東部ジャワのブロモ山麓に住む古代ジャワ仏教徒の後裔を対象として布教した結果、30カ村98,000人の村民が仏教徒となったという [Bakker 1976: 150]。

このように1950年代の末ごろには、インドネシアの仏教界に大きな進展のあとがみられるが、同時に1963年から65年にかけて、各地に新しい団体結成の動きがみられるなど、仏教徒の間に分裂のきざしも現われ始めたことが注目される [Widyadharma 1977b: 13]。この傾向に拍車をかけたのは1965年に発生した9.30事件以降の政治状況である。この時期の政治状況と仏教との関係については専門家によってさらに厳密な検討が加えられるまで断定は差し控えたいが、さしあたり「無神論者」(ateis)の存在が許されなくなり、「パ

23) この時の模様については TB [66 (Djuli, 1959): 6-7] に写真入りで解説されている。

ンチャ・シラ」の第1条にいう「唯一神の信仰」(Ke-Tuhanan Yang Maha Esa) に基づかぬ宗教は、法的な意味における「宗教」(agama)とは認められなくなったという状況の重要性を指摘しておきたい。なぜなら、その後今日に至るインドネシア仏教各派の対立抗争は、そのほとんどが Ke-Tuhanan Yang Maha Esa あるいは Tuhan Yang Maha Esa の解釈をめぐるって発生しているからである。²⁴⁾

〈Ke-Tuhanan Yang Maha Esa〉の問題がインドネシアにおける宗教の存在にとって、政治的にきわめて重要な問題となるという可能性についての見通しを、Ashin Jinarakkhita がいつの時点で立てたのかを知ることには手許の資料だけでは不可能であるが、²⁵⁾ か

24) Ke-Tuhanan Yang Maha Esa はしばしば Tuhan Yang Maha Esa の問題としても語られる。いうまでもなく前者は「唯一神の信仰」であり、後者はその信仰の対象としての「唯一神」を指す。一神教にとっては自明なこの区別が、後述する上座部仏教徒にとっては別個の意味をもち始めている点に注意したい。すなわち、Tuhan が人格神を指すのに対し、Ke-Tuhanan は抽象的な「神性」を意味するとし、したがって、agamaの要件とされている Tuhan Yang Maha Esa は必ずしも人格神である必要性はないのではないかという議論である。なお、上座部仏教に Tuhan Yang Maha Esa ありやという問題提起に対するひとつの回答は、1978年8月11日付で公表された宣言 Pernyataan Majelis Pandita Buddha Dhamma Indonesia (madhazab Theravada) に求めることができる。ここでは Mahatma Gandhi の“The Way of the Buddha”という一文を引用しながら、ブッダはたしかに a being called God という観念は退けたが、むしろそのことによって、かえって神の永遠性を回復したのであるという議論を展開して、theravada=ateis 説に反論している。

25) 1965年9月30日以後の政治状況に対する中国系インドネシア人の対応については、C.A.Coppel の学位論文 “The Indonesian Chinese in the Sixties: A study of an ethnic minority in a period of turbulent political change” (1975. Monash University.) がある由であるが未見である。

れは早くも1965年5月に『仏教における〈唯一神信仰〉』(Ke-Tuhanan dalam Agama Buddha)という小冊子をかれの支持者のひとりに書かせて出版している[Dhammaviriya 1965]。²⁶⁾この本のもっとも重要な部分は「仏教の要点」(Ichtisar Agama Buddha)という一節で、ここでは仏教が、(1) Tuhan Yang Maha Esa, (2) Nabi-Nabi, (3) Kitab2 Sutji というインドネシアにおける「宗教」(agama)の3要件を完全に満たしていることを強く世に印象づけようとしている。それによると、まず仏教における「唯一神」は Sang Adi Buddha (本祖仏)である。つぎに「聖人」²⁷⁾については、ゴータマ・ブッダ(Sang Buddha Gotama)と「諸菩薩」(Para Bodhisattva)の名があげられ、「聖典」(Kitab2 Sutji)は、(1)「三蔵経」(Tipitaka), (2)『ダンマパダ』(Dhammapada)と、(3)『聖大乘論』(Sang Mahayanikan)²⁸⁾の3種であるとしている。

一見して明らかなように、Adi Buddha 観念の導入といい、『聖大乘論』を「聖典」のひとつに加えたことといい、上座部仏教の正統からは明白に逸脱している。この逸脱は特殊インドネシア的な宗教政治状況に対する止むを得ぬ自衛的対応策であったとはいえ、こうした正統上座部の伝統からの逸脱にやがて不満をとる者が出るであろうことはいわば当然であったといえよう。

こうした状況を背景として Ashin Jinarak-

khita とはやや系列を異にするインドネシア人僧侶が生まれ始めたことは注目に値する。1966年には現在バリ島で布教を続けている Girirakkhito 比丘がバンコクの Wat Benchamabopit で得度を受けた。翌1967年にはセイロンのナーラダ長老の許で Sumangalo 比丘が誕生している。1968年にはバンコクのタマユット派(Thammayut Nikai)の中心寺院 Wat Bowonniwet の住職であるプラ・サーサナソーボン大長老(Phra Sasana Sobhana)が初めてインドネシアを訪れ、それ以後今日までに及ぶインドネシアとタイとの宗教的連帯の基礎を造った。翌1969年には同じボーウォンニウェート寺院から、4名の比丘よりなる布教団(Phra Thammathūt < Dhammadūta)が派遣され、ジャカルタ周辺地区を中心に活動を始めた。タイのプラ・サーサナソーボン大長老は、1970年の5月にもふたたび来訪し、ボロブドゥールにおいて5名のインドネシア人に得度を与えている。これらの5名の新比丘は、いずれも Ashin Jinarakkhita の許でサーマネーラとして出家した人びとであった。²⁹⁾

南方上座部の中でもとりわけ保守的で戒律を重視するタイのタマユット派の影響は、Adi Buddha 観念の導入に代表される Ashin Jinarakkhita の「非正統的」仏教に対する批判を加速することに貢献したように思われる。しかし、Ashin Jinarakkhita 支持派と反対派との対立の背後には、両派の複雑な利害がからまっており、それらについての正確な情報が得られない現状では軽率な判断を下すことは危険である。それゆえここでは、資料的に確認可能な事実のみを時代を追って記録し、今後の研究の足がかりとするにとどめたい。

1972年1月12日, Girirakkhito Bhikkhu

29) 以上は在ジャカルタのインドネシア人比丘アッガパーロー師の御教示による。

26) 序文は4月22日付、印刷の日付は5月3日で、1,500部刷られたらしい。

27) “nabi” はもちろん「予言者」が本義であり、辞書にも“prophet”としてしか載っていないが、agama の要件としての“nabi”を「予言者」と訳すのは適当でない。ここでは李毓愷(編)、『印尼中華大辞典』(1959. ジャカルタ: 国民書房. 275 r.)にしたがって、かりに「聖人」としておく。

28) 『聖大乘論』については、岩本裕氏による詳細な解説がある[岩本 1973: 273-275]。なお、Adi Buddha については Dhammaviriya [1965: 9] および Dhammavadi [1971: 9-13] に詳しい。

と Subhato Bhikkhu というふたりのインドネシア人比丘は、「Ashin Jinarakkhita の指導する Maha Sangha Indonesia から脱退する」旨の声明を公表した [Widyadharma 1977b: 15]。これに対し、Gabugnan Tridharma Indonesia (G.S.K.I. を改称した組織) と Perbuddhi (Perhimpunan Buddhis Indonesia) は、それぞれ1月24日と25日に、かれらの脱退行為と、かれらが志を同じくする3人の比丘と5人³⁰⁾で新たに結成することとした Sangha Indonesia に対し支持を表明した。³¹⁾この結果、インドネシアには Maha Sangha Indonesia と Sangha Indonesia というふたつの比丘僧伽が存在することになった。

1974年8月、宗教省ヒンドゥ教・仏教局長 (Direktur Jendral Bimbingan Masyarakat Hindu dan Buddha, Departemen Agama Republik Indonesia) の「希望によって」(atas prakarsa), これらふたつの比丘僧伽を統一した「インドネシア最高サンガ」(Sanga Agung Indonesia) が結成された [*Ibid.*: 16]。

しかしながら、1976年10月23日、スマランで突如 Sangha Theravada Indonesia が結成されることによって、ふたたびインドネシア比丘僧伽の統一は破られることになった。³²⁾なお、正確な時期は不明であるが、これと相前後して、Ashin Jinarakkhita の弟子であった Bhikkhu Surya Karma Chandra が Sangha Mahayana を結成したので、現

在、インドネシアには Sangha Agung Indonesia (Buddhayana),³³⁾ Sangha Theravada (Theravada), Sangha Mahayana (Mahayana) という三つの比丘僧伽が存在していることになる。

こうした状況の下において、インドネシア仏教徒の統一を推進するため、1979年5月7日、8日の両日、ジョクジャカルタにおいて三つの比丘僧伽の代表者と、在家7団体³⁴⁾の代表が集って「インドネシア仏教徒大会」(Kongress Umat Buddha Indonesia) を開催した。その結果、問題となっていた “Tuhan Yang Maha Esa” の解釈については、つぎ

32) The Charter of Sangha Theravada Indonesia (Mimeographed). 1976年10月23日付で、署名者は nayaka of the meeting の資格で Bhikkhu Aggapalo となっている。資料を御提供下さったアッガパーロー師に心より御礼を申し述べたい。なお、TEMPO (May 19, 1979) 参照。原文が入手できなかったため、US Embassy Translation Press Review No. 96/1979 (May 22, 1979), p. 4 所収の英訳を利用した。資料を提供して下さった中村光男氏に感謝したい。

33) Ashin Jinarakkhita 師は、現在、独自の総合仏教の形成を目指して、自派を Theravada と Mahayana の別を超えた Buddhayana であるとしている (参照, [前田 1976: 8])。なお、同師の活動の中心は1971年10月12日の Vihara Sakyawanaram (釈林禅寺) の開山以来、チバナス (Cipanas) 東方の小村 Pacet に移っている。同地にはもっとも古い Vihara Nagasena と Vihara Aryamularama (本清寺) の3寺がある (同派の比丘で Sangha Agung Indonesia の Maha Lekhanadikara である Bhikkhu S.D. Aryasasana 師の御教示による)。

34) 本稿においては在家仏教徒団体について詳しく論じる余裕はなかったことをお断りしておきたい。なお、同「大会」に出席した在家7団体はつぎのとおりである。Majelis Agama Buddha Nichiren Shoshu Indonesia, Majelis Buddha Mahayana Indonesia, Majelis Dharma Duta Kasogatan, Majelis Pandita Buddha Dhamma Indonesia (MAPANBUDHI), Majelis Pandita Buddha Maitreya Indonesia (MAPANBUMI), Majelis Rokhaniwan Tridharma Seluruh Indonesia (MATRISIA), Majelis Upasaka Pandita Agama Buddha Indonesia (M.U.A.B.I.) (以上、宣言書の署名順)。

30) Bhikkhu Jinapiya, Bhikkhu Girirakkhito, Bhikkhu Jinaratana, Bhikkhu Sumangalo, Bhikkhu Subhato の5人の比丘。

31) G.T.I. が公表した1972年1月24日付の宣言文 “Declaration of support to the establishment of the new Sangha Indonesia under the leadership of Bhikkhu Jinapiya/Girirakkhito” および1972年1月25日付 Perbuddhi Chairman 発 The World Fellowship of Buddhists 宛書簡参照。これらの資料の被見を許されたアッガパーロー師に感謝申し上げる。

のような注目すべき合意が行われた。³⁵⁾ すなわち、

- (1) すべてのインドネシア仏教諸派は、〈唯一神〉の存在を信ずる。
- (2) すべてのインドネシア〔仏教〕諸派は〈唯一神〉をそれぞれ異なった名称をもって呼ぶが、それらはその本質において同一である。
- (3) すべてのインドネシア仏教諸派は、他の仏教諸派によって用いられる表現を尊重する。

この合意によって、これまで各派が主張していた〈唯一神〉の解釈が、いずれも「その本質において同一」(pada hakekatnya adalah satu dan sama)であることが確認され、しかも対外的には〈唯一神〉の存在を確信する存在として、「宗教」(agama)としての仏教の立場が再確認されたことになった訳である。

おわりに

インドネシア現代仏教の研究は、まだ緒についたばかりであり、また仏教各派の動きもきわめて流動的であるため、今後とも注意深くその動向を見守りながら研究を続けていく必要がある。本稿がこうした研究の発展に少

35) 原文、以下のとおり。

- (1) Semua Sekte Agama Buddha di Indonesia berkeyakinan terhadap adanya Tuhan Yang Maha Esa.
- (2) Semua Sekte di Indonesia, menyebut Tuhan Yang Maha Esa dengan sebutan yang berbeda-beda tetapi pada hakekatnya adalah satu dan sama.
- (3) Semua Sekte Agama Buddha di Indonesia bersikap menghormati sebutan yang dipergunakan oleh Sekte-sekte Agama Buddha yang lain.

(Panitia Nasional Kongres Umat Buddha Indonesia, *Ketetapan-ketetapan dan Keputusan-keputusan Kongres Umat Buddha Indonesia, Yogyakarta 7-8 Mei 1979*. Jakarta. 1979. pp. 5-6.)

しでも役立つことがあれば望外の幸せである。なお、本稿の執筆をすすめる数々の貴重な助言を賜った土屋健治氏、資料の検索に御協力下さった加納啓良氏、インドネシア語の解釈につき御指導を賜った加藤剛氏、貴重な資料を提供して下さいの中村光男氏に心よりお礼を申し上げたい。³⁶⁾

参考文献目録

I. 定期刊行物

- DDNI* *De Dhamma in Nederlandsch-Indië*. Buitenzorg. 1934.
MD *Moestika Dharma*. Tjitjoeroeg, Preanger. 1932-1941.
NB *Nama Buddhaya*. Buitenzorg. 1933-1934.
Panorama Tjitjoeroeg, Preanger. 1926-1930.
SKGP *Sam Kauw Gwat Po*. Tjitjoeroeg, Preanger. 1934-1942.
TB *Tri Budaya*. Djakarta. (1954-1967?)

II. 著書・論文およびパンフレット

1 外国語

- Anonymous. 1951. *The Theosophical Movement 1875-1950*. Los Angeles: The Cunningham Press.
 Bakker, J. W. M. 1976. Contemporary Buddhism in Indonesia. In *Buddhism in the Modern World*, edited by Heinrich Dumolín. New York: Macmillan and London: Collier Macmillan.
 Besant, A. 1958. Theosophical Society. In *Encyclopaedia of Religion and Ethics*. Vol. 12, 300-304.
 Biro Pusat Statistik. 1975. *Statistik Indonesia 1975*. Jakarta: Biro Statistik Indonesia.
 Buku Peringatan. n.d. (1959?) *Buku Peringatan Perajaan Waiçak 2503*. Semarang: Panitya Pusat Waiçak.
 Dhammavadi. 1971. *Ketuhanan dalam Agama Buddha*. Patjet, Sindanglaja: Buddharasmi, Vihara Nagasena.
 Dhammaviriya. 1965. *Ke-Tuhanan dalam Agama Buddha*. Bogor: P. U. U. I.
 GSKI. 1952. *Waiçak Açadha 2496 B. E., 1952 C. E.* Jakarta: Gabungan Sam Kauw Indonesia.

36) 本稿のインドネシア語の綴り字は、一部の地名などを除き資料に現われるままの綴り字をそのまま用い、あえて統一しなかったことをお断りしておきたい。

- Kwee Tek Hoay. 1931. *Buddha Gautama; I: Prins Siddhartha di Waktue Moeda*. Batavia: Drukkerij Panorama.
- Malalgoda, Kitsiri. 1976. *Buddhism in Sinhalese Society 1750-1900*. Berkeley: University of California Press.
- Murphet, H. 1972. *Hammer on the Mountain: The Life of Henry Steel Olcott (1832-1907)*. Wheaton, Madras & London: The Theosophical Publishing House.
- Olcott, Henry S. 1954. *Old Diary Leaves. Second Series, 1878-83*. Adyar: The Theosophical Publishing House.
- Suryadinata, Leo. 1978. *Eminent Indonesian Chinese, Biographical Sketches*. Singapore: ISEAS.
- Widyadharma, Pandita S. 1977a. *Inti Sari Agama Buddha*. Nalanda dan Jakarta: Yayasan Dana Pendidikan Budhis.
- . 1977b. *Agama Buddha dan Perkembangannya di Indonesia*. Jakarta Raya: Buddha Dharma Indonesia (Budhi).
- Willmott, Donald Earl. 1960. *The Chinese of Semarang: A Changing Minority Community in Indonesia*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- 2 日本語
- 岩本 裕. 1973. 「インドネシアの仏教」『アジア仏教史インド編Ⅵ 東南アジアの仏教』岩本 裕(編), 259-309ページ所収. 東京: 佼成出版社.
- 前田恵学. 1976. 「インドネシアにおける最近の仏教」『印度学仏教学研究』25(1): 1-9.